

プラス思考で考える！

夢ある京都の少子高齢社会



皆さんこんにちは。
生涯学習マスコットのマナビィです。
ブンブン飛び回って、皆さんの学びを応援
しています。ヨロシク！

さて、京都で活動する 213 の生涯学習関係団体のネットワーク
組織「京都市生涯学習市民フォーラム」の総会と設立 20 周年記
念シンポジウムが開催され、取材にブンブン行ってきました。

堀場雅夫会長の楽しい進行に会場が笑いに包まれる中、少子高
齢社会のポジティブな生き方をみんなで考えました。

今日はその様子をレポートします。



平成 25 年 12 月 3 日 (火) 午後 2 時 30 分 ~ 4 時 京都産業会館 8 階「シルクホール」

〈パネリスト〉 堀場 雅夫 氏 (京都市生涯学習市民フォーラム会長/株式会社堀場製作所最高顧問)
養老 孟司 氏 (解剖学者・京都国際マンガミュージアム館長)
奥野 史子 氏 (スポーツコメンテーター・京都市教育委員)
門川 大作 氏 (京都市長)

少子化・高齢化をどう見るか

(堀場会長)

今日のお題は、素直なお答えをもらおうと、つついネガティブになりがち
ですが、あえて「夢ある京都の少子高齢社会」とさせていただきました。私
も高齢化と他人事のように言っていますが、12月1日で89歳になりました。

私は、高齢化というのは、年齢はあまり関係なく、その人のアクティビ
ティが大切だと思っています。年が若くても、老人のような若者がたくさん
います。新入社員に「欲しいものはないか。」と聞くと、昔はスポーツカーやコ
ンピュータと答えていましたが、今は、「有給休暇を使ってゆっくり旅行し
ようか…」と。定年前のおっさんか！(笑) これが今の若者です。私は、年齢は
関係なし、発想でもって考えていきたいです。高齢化を医学的に見るとどう
でしょうか。

(養老先生)

全員が年をとるので、当たり前のことですよね。たまたま世の中でお年寄
りの比率の高い状況がやって来た、それが初めての経験だということ
です。20~30年辛抱するとお年寄りはいなくなりますので、その頃には忘
れているのではないのでしょうか。(笑) とにかく、現在の特殊な事情であると

はじめり
はじめり…



は考えています。ただ、平均寿命が延びたので、昔に比べると、いつの時代もお年寄りの比率が多少高い状況は残ると思いますが。私は全然気にしていませんよ。

(奥野委員)

私は今、10才・7才・2才の3人の子どもを抱えています。我々の世代は、その子たちが大きくなったときのことを心配しますね。子どもたちが背負うものって、すごく大きいだろうな…と。3人産みましたが、果たしてこの子たちの将来は明るいものになるんやろうかと、漠然と思います。どうやって生きる力をつけるか、主人と一緒に「この子ら、どないたくましく育てようか…」と日々考えています。今はなんでもある社会なので、その中でたくましく育てるのは難しいことです。日々の生活の中で、あえてある程度枯渇した状況をつくるなどしていかないと、今の子どもたちは強くは育たないと思います。

養老先生がよくおっしゃる「体を使って、体で覚えさせる」ということですが、私たちはスポーツをしているので、そこは教えてあげられることやと思って日々子育てしています。

(堀場会長)

親が心配するほど子どもはどうもないんです。その時代時代でちゃんと生きていくと思いますよ。

(奥野委員)

私自身もほったらかされてきたなと思います。あまり手を掛け過ぎるとだめですね。今は子どもの数が少ないので、大人が一生懸命、寄ってたかって育てて、期待し過ぎたり手を掛け過ぎたりして、子どもの中に本当の意味での遊びが少ないように感じます。

(門川市長)

子どもが減ってきているから、かえって抱えるものが大きいんじゃないか、そういうことはあると思います。

高齢社会はプラス面がたくさんあります。ただ、元気で高齢化であること。みんなでスポーツもして、生き生きと元気に健康寿命を延ばしていくことが大事ですね。

少子化は一定やむを得ない流れでもあります。個人の自由ではあるのですが、若い人が結婚されないのが困ったことやなと思います。しかし、平成21年に京都市で6,000人の未婚の方にアンケートを取ると、9割の人が結婚を希望されていました。それではなぜ結婚しないのかとたずねると、4割の人が「異性との良い出会いがなかったから。」そこで、4年前から『京都婚活』をしています。以前は、近所のおっちゃんやおばちゃんなどが「あんた、結婚しよし!」とあって、少々無理矢理(笑)ひつつけたり、出会いの機会を作ら



『京都婚活』とは…

京都市では、未婚率、平均初婚年齢が全国平均を上回っていることから、結婚を望む市民の方々に出会いと交流の場を設ける「京都婚活」を平成22年から実施。11月30日に行われた「京都婚活2013」には、男女各150人の募集に対し、男性約500人、女性にいたっては約1,000人ももの応募がありました!



れていたものですが…。地域の絆ですね。

(養老先生)

だいぶ前から、男女共学の学校がほとんどになりました。僕は男子校（私学）に通っていて、中学・高校には男しかいませんでした。そうすると、年頃になると女の子に幻想を抱きます。今は小さい頃から男女を一緒にしています。「男女七歳にして席を同じうせず」と言いますが、7歳くらいから一緒にしておく、その時代（年頃）は女の子が強いんです。小説家の**チェーホフ**は、「同じ大きさのネズミと猫と一緒に飼っておくと、（同じ大きさということは、猫は子猫で、ネズミは大人ですね。）猫は大人になってからネズミを見ると逃げるようになる」と言っています。まさしく男性は猫状態ですね。（笑）

(堀場会長)

人間でもそのとおりだと思いますね。慣れすぎると、性が違うことをあまり感じないですもんね。

(養老先生)

それは確かにあります。昔は割と（男女を）離していましたから。それに、お互いに対する『誤解』がないと男女が結婚しようとはなりませんよね。（笑）

(門川市長)

「今の学校教育のやり方は女性に向いていて、男性的な能力を発揮させるものになっていない。」と言う人が国内外でも出てきましたが、30年ほど経つと、日本どころか世界中のリーダーは女性で、その頃には男女共同参画と言えば「男の社会参画」とか言い出すかもしれませんね。

(養老先生)

明治時代は男女の**平均寿命**が同じでした。今は7年くらい男性が短いです。そして、**100歳を越えている人**の8割が女性です。女性がどうして長生きするのかというと、生物学的に強いからです。生物学的に強いものがそのまま長生きするというのは、野蛮な社会ではないでしょうか。（笑）文化や文明はそれを修正するために働くもので、そういう意味では、明治のほうがはるかに文化的・文明的だったのではないのでしょうか。今は、強いものがそのまま強い状態、つまり野蛮な社会に戻っているんですね。

結婚しない人が増えているのは世界的な傾向です。**フランス**では一緒に暮らしている人で、結婚しているカップルは約15%です。結婚してもしなくても、子どもがいればいいので、子どもに対する優遇政策を取っています。逆に、結婚しているのが損みたいになる可能性がある、そのあたりは問題ですね。

マナビの
ウンチク



「男女七歳にして席を同じうせず」

孔子の教え。「7歳にもなれば、男女の別を明らかにして、みだりに慣れ親しんではいけない」という意味です。

アントン・チェーホフ

(1860~1904年)

ロシアの劇作家・
短編小説家。

ちなみに養老先生は
東京大学医学部教授
だったけど、チェーホフもモスクワ大学医学部を卒業したお医者さんだったんだ。



日本人の平均寿命

男性：80.3才
女性：86.7才（世界一）

日本の100才以上の人口

25年9月時点で約55,000人！女性が87.5%を占め、国内最高齢も大阪市にお住まいの女性で、なんと115歳だそうです！

フランスの結婚事情

「結婚」より「事実婚」が人気で、さらに結婚より緩やかな法的な契約関係「PACS（パクス）」（連帯市民協約…性別に関係なく、成年に達した二人の個人の間で安定した持続的共同生活を営むために交わされる契約）を結ぶカップルも年々増加中。婚外子の割合が過半数を越えており、婚外子への法的な差別がないことがその要因のようです。



人が生きていくということとは。

(堀場会長)

結婚するのが面倒やと言いますね。今まで自由に生活して、個人的な生活パターンをしっかり持ってしまうと、同居人がいること自体が面倒になる。

(養老先生)

その根本にあるのは、人が生きるの「自分のため」か「人のため」かということ。戦後の教育では、「自分のため」に重点を置いてきました。自分のために生きていくとなると、連れ合いはいらないというのが一番極端な形です。親にしてみると、子どもの世話にはならないというのが割と普通になってきました。

僕は戦前が良いとは言いませんが、戦後のこの傾向はもう直したほうがよいと思っています。特に、死ぬことを考えるとよくわかりますが、実は今、自分が死んだとしても自分は困らないんですね。ここで今、僕が心筋梗塞で倒れて死んだとしても、困るのは皆さんであって、僕は全然困らない。(笑)それをひっくり返すとすぐわかりますが、人が生きているのは人のためなんです。その面から言えば、病気もそうで、今の人は、病気は自分になるものだと思っています。例えば、連れ合いががんになると他人事ではありません。しかし、それを個人中心で考えていると、死ぬことも病気も自分だけのもののように思います。そういった考え方が最も現れているのが、近年増えている自殺だと思っています。自分の命は自分のものだところかと思わされた社会で生きているから、死ぬときも勝手に死ぬのだ…と。でも、死なれて一番嘆き悲しむのは身近な人ですね。



京都は日本全体でみると、人間関係がうるさく残っている場所だと思います。僕は根っから関東で、鎌倉の隣の横浜市は、戦後約100万人だった人口が、現在では約400万人になっています。ほとんど外からやってきた人で増えました。そうすると単身所帯が4割くらいで、人と関わらない生き方をしていますね。それも基本にあるような気がします。

確かに人間関係が濃いとうるさいけれど、人間は社会的動物なので、それは仕方ありません。「人が生きているのは世のため、人のためだ」と、考え方を根本的に変えるように教えたほうがよいと思います。ただし、行き過ぎると副作用が出ますが…。

(奥野委員)

最近、生前に遺書などを書いて、身辺を整理してから亡くなる「終活」がブームになりつつありますね。このあいだラジオのリスナーの方が「終活しようと思ったけれどやめました。」と。なぜかという、「わずらわしいことを娘や息子に残すことが、私が子どもたちに残す最後のメッセージです。」それを聞いて、これまで私は両親に整理していってもらわないと困ると思っていましたが、それはいらんかなあと思ったんです。わずらわしいことが世の中からなくなって、便利になり過ぎて、ちょっとしたことをわずらわしいと思ってしまうのか、それこそ結婚はわずらわしいの極みですが(笑)、そこで学ぶことが実はすごくいっぱいあるんです。先輩方、そうですね。

(堀場会長)

子どもができること。これほどわずらわしいことはありません。(笑) それか、かなんから産まないということもあるかもしれませんね。1人つくると十分やと思って、2人目、3人目はつくらないとか…。

(門川市長)

子育てはわずらわしいし、リスクを抱えて、労力を注ぎ込んで投資しても、返ってくることは全く保証されない。しかし、だからこそ楽しいんですね。だからこそ価値がある。それなのに、物事を自分中心に損得で考えるようになってしまったんでしょうね。

(堀場会長)

女性も、昔は料理を毎日作っていましたね。この頃は、百貨店の地下に行くと、出来合いのものがなんでもある。味もそこそこやし、面倒くさいからそれを買ってきて、お皿にあけたらそれで終わり。たまに奥さんが作ると、「今日はまずいな！」とか。(笑) そういう時代になっていますよね。料理を作った、その愛情を届けたいという気持ちがもうないのかな…

(奥野委員)

そんなことないですよ。正直言って、面倒くさいなあと思うんですが、子どもが見ている反面、ちゃんとせな…と。子どものおかげで大人にしている部分がある部分です。子どもを育ててへんかったら、私自身はもっと子どものままやったやろうなと思うところもあります。「子育ては親育て」とよく言われますが、実際にやってみて本当にそう思います。せっかく子どもを産める体に生まれたのであれば、それを経験してみるほうがもっと人生が豊かになり、いろいろなものの見方ができるようになると思います。だから、若い女の子には絶対産んだほうがいいよと言います。少子化や高齢化のことももちろんありますが、それ以上に、自分自身が子どもから成長させてもらえる部分があるので、声を大にして言っています。でも、やっぱりわずらわしいんでしょうか。

マナビの
ウンチク



「終活」とは…

生前のうちに自身のための葬儀や墓などの準備や、残された者が自身の財産の相続を円滑に進められるための計画を立てておくこと。「終活本」などと呼ばれる関連書籍の出版や「終活セミナー」の開催も多数行われていますね。



(門川市長)

『京都婚活』をやり始めたら、区役所や色々な地域でも婚活事業をやりだしてきて、それをきっかけにひっつかはるんですわ。このあいだ、市長への手紙の中に「2年前の『京都婚活』で出会って、その後けんかしたりいろいろありましたが、結婚します。」というのがあって、とてもうれしかったですね。いろいろな働きかけをしたら、ただけの効果がある。私が若いときは、1年に1組はまとめようという自分自身で目標を作っていました。おせっかいな話やけど、皆さん、結婚したいひんのちゃうかと思っている人の中にも、一生懸命に言うたら、意外と結婚するのでもいいなあと言う人がおられるんですよ。私の実感です。

体を変えると考え方が変わる

(堀場会長)

えらい、時代が変わりましたがけど、100年くらいすると、明治維新のときくらいの人口になるという見方もあるようです。約1億2,000万人の日本の人口が、明治の初めの3,000万人くらい、4分の1になってしまうと。

もし日本が3,000~4,000万人の人口になったら、何が起こるでしょうね。例えば、一人あたりの土地は3~4倍になりますやん。ラッシュアワーも3分の1になったら、座って行けるわね。

(奥野委員)

でも、電車の数も減りますよ。

(堀場会長)

あっ、そうか！(笑)

北欧では人口が1,000万人未満の国がたくさんありますが、ちゃんと生活しています。日本は土地も狭いし、3,000万人くらいでも不思議ではないですよ。



(養老先生)

人口が減ることで一番心配するのは、経済規模が下がって国力が落ちることですね。僕の意見は、減った分だけ生きている人が働けばいい。つまり、ゆっくり減っても急激に減っても、働きを4倍に上げたらいいわけです。

僕が思うに、今の人は頭で考えすぎるのではないのでしょうか。ほとんどの時間、携帯電話などを見えています。横須賀にはネット依存症の治療のための病院があるほどで、抜けられなくなっちゃう。その一番の問題は、体を使っていないということ。前から提案していますが、小学校区を歩いて30分かかるところにしろ、なんで近くに行くんだ…と。また、建物の階段は一段一段、幅と高さを変えなさい、と。「バリアオンリーの家」です。自分の訓練をしなくなって、若いときから動いているのは指だけという状況は、生きものとしては不健全です。外に出ると、風向きも変わるし、日当たりも変わって

マナビの
ウンチク



北欧の人口

ノルウェー、デンマーク、フィンランドはいずれも500万人前後、スウェーデンは900万人くらいだよ。

くる。しかし、建物の中にいたら明るさも温度も変わらないので、生きものとして怠けちゃう。だから、結婚にしても何にしても、やる気がなくなってくるのだと思います。

体を変えると考えが変わる。頭で考えるのが先だと思っているけれど、これは間違いなんです。体の調子で頭が決まってくる。今は理屈が通らないと何も通りませんが、理屈が通らないことに寛容にならないといけませんね。

(堀場会長)

世の中全体がますますロジック（論理）の方向へ向いていますね。

(養老先生)

言葉を優先してきているのは、国会の会期が延びていることにも現れていますね。法律を作るところである国会が大きくなっている。言葉で世界が動くと思っている人が非常に増え、言葉を作ったら安心するようになっていきます。言葉とかで世界ができていると思込んでいるに近い状況で、それがいろいろな問題に現れている気がします。

京都みたいなまちはいいなと思います。僕は虫を捕りますから、今は冬で、虫がいなくなったから辛抱して座っていますけれど、春になったら座ってなんかいられない。子どもならそれが普通です。大学の講義で、4・5月の春の気候の良いときに、「朝からこんな天気の良い日に、こんなところで椅子に座って白髪のじいじの話なんか聞いてんじゃないよ。」と学生に言っても誰も席を立たないんです。しかし、学期末にレポートを書かせたら、「先生の講義の中で、それが一番もつともだと思いました。」と書いています。(笑) もつともだと思うなら出て行けばいいだろうと思いますね。今の若い人は、教師が教壇でいかにもつともなことを言って、それをもつともだと思ったとしても、実行してはいけないという教育を暗黙のうちに受けています。秩序を保つことがまず大事だと思込んでいます。

福井の小学校に招かれたとき、授業に虫捕りの時間を入れてもらいました。いろいろと大変でしたが、終わってからその先生から「子どもたちがこんなに大きな声を出すのを初めて聞きました。」と言われました。(大人にとって) 子どもは怖くて、ライオンのそばにいるようなものですから。(笑) しょうがないから、こうして子どもたちを虫捕りに連れて行っているんですね。「虫捕り」は単なる言い訳で、別に虫は捕らなくても構わないんです。また、親がいるのといないのとでは、子どもの態度が全く違いますから、ときどき親から離さないと。昔は「親はなくても子は育つ」と言いましたが、今は親があっても子は育ちます。

(堀場会長)

確かに兄弟がたくさんいると、親だって一人ひとり面倒をみきれないけれど、少子化で子どもが一人だったら、みんなが集中するでしょ。一人の子どもに、両親と嫁さん側と旦那側のおじいさんとおばあさん、6人も親がい



マナビィの
ウンチク



養老先生の虫好き

養老先生のご趣味は、昆虫採集。『養老孟司のデジタル昆虫図鑑』（日経 BP 社）なども出版されています。



ることになる。その親たちがそれぞれ干渉するから、子どもは大変ですよ。

(養老先生)

驚くのは、大学の入学式に親が来るんですよ。僕らのときは一人も来なかったのに。

(堀場会長)

もっとひどいのは入社式に親が来る。「そんなもん辞めさせ！」と言いました。(笑)

私たちもひとこと！
フォーラム会員の皆さん



ここで、フォーラム加盟団体の皆さんに事前にお聴きしていたアンケートのご意見を紹介しました。

- 団体において、子育てが家庭教育の支援、高齢者の学びの場の提供など、少子高齢化に関わる活動内容を教えてください。
- 活動を通して感じること・工夫点を教えてください。
- 少子高齢化が進むと団体の活動はどんな影響を受けると思いますか。(長所・短所)
- 身近な場面で少子高齢社会であることをどんなとき・どんなことに感じますか。

など

[アンケート結果の一部はこちらからご覧いただけます](#)

素晴らしき「ひつまぶし人生」

(堀場会長)

昔は還暦で60歳といえば、おじいさんおばあさんと思っていましたが、この頃は60歳というと「お前若いな、何しとんねん。」という時代になりました。年齢の7掛けくらい、60歳といっても42歳くらいと思ってやらんといかん。私の会社は65歳で定年ですが、若い人に次々と責任ある仕事を任せたい。すると、年寄りがいると頭が重たいから、そういう人たちはラインから外れて、アドバイスする側にもっていくわけです。

シルバーベンチャーというのを組織しています。企業には非常にミスマッチがあり、本当に人材が欲しいところに人が来ず、もういいというところにいっぱい来たりします。会社を定年で辞めた方で、肉体的にも精神的にも元気な方はいっぱいいます。中小企業は技術屋が欲しい、営業力のある人が欲しいというので、そういうところへどんどん行ってもらうんです。給料をたくさんもらうと年金の額が下がるので、せいぜい15~20万円くらいで。今までは100万円くらいの月給をもらっていた人もいます。しかし、その人たちは、嫁さんに退職金とか年金とかは全部渡して、新しく勤めたところの給料15~20万円を自分のポケットに入れる。サラリーマンで勤めていた頃は3~5万円の小遣いだったのが、急に15~20万円入んですよ。みんな飲みに行ったりして、俄然人生が変わります。また若くなって、やる気満々になります。そして、その人に来てもらった企業も、これだけの能力ある人が安い値段で来てくれたとハッピーになります。Win・Winの関係で、私はこれを「ひつまぶし人生」と言っています。ひつまぶしのように、同じ自分だけども、自分の働き・システムの違いによって3度人生を楽しめる。そのためにも、第2・第3の人生のアクティビティが高くてできるようなシス

マナビィの
ウンチク



「ひつまぶし」とは…

うなぎの蒲焼を細かく刻んで、おひつに入れたごはん混ぜ合わせて食べる名古屋名物の料理。

- ①一杯目はそのまま食べる。
- ②二杯目はネギやわさびなど薬味をつけて食べる。
- ③三杯目は薬味とだし汁を入れて食べる。(お茶漬けにする。)

同じものでも3度美味しくいただけるね。



テムを作らんとあかん。少子化になって労働力が減る心配はないんです。同じ会社にずっといると、頭が重たいと言われるから、次の受入れ体制をきちんとつくる。国内だけでなく、海外にも日本の素晴らしい人たちがいくらでも受け入れる体制はあります。

草むしりや孫の世話だけをしていると、だんだん体が弱ってきてほけ老人になってしまいます。いつも第一線にいると、なかなかほけませんよ。国も介護保険や老人医療に金を使っていますよね。この分で新しい人生の受入れ体制を考えてもらったら、その人も生き生きするし、国も金がいらん。一番大事なのは、ピチピチしながらコロっといくことです。「PPK（ピチピチコロリ）運動」と言っています。これをすると、嫁さんも子どもたちも喜ぶし、介護保険もいらん。そのためにはピチピチ働かさんといかん。僕は医者に「年やし、ステーキ食うな」とか「酒も飲むな」とかと言われるけれど、食べて飲んで、每晚飲み明かせ！すると、必ずいつか帰りがけにコロッといきよる。国家のため、地方公共団体のため、家庭のため、すべてコロっといったらいいんです。(笑) こういう社会が「夢ある京都の少子高齢社会」、「PPK運動」というのはいかがでしょうか。

(門川市長)

できるだけ健康寿命と生物学的な寿命を一緒にしていく。そうすれば、堀場製作所の社是「おもしろ おかしく」のとおり、その人にとっても人生が豊かになりますね。

100歳を越えた人が京都で1,000人を越えました。しかし、100歳を迎えた人の半分は、病院や施設におられるのが現実です。堀場雅夫さんは昨年、米寿(88歳)のお祝いをされましたが、間違いなく元気に100歳を迎えはります。こういう目標を持たなあかんのですね。

そのためには、例えば片足でパッと立てるかどうか。これを1日何回かする。片足1分ずつ1日3回やる。

「ロコモ予防運動」といって、骨や筋肉、関節等を鍛えて、自分の意思で歩いたり食べたりできると人生は楽しめる。

自ら運動して、積極的に人とコミュニケーションをとって、認知症にならないためにはどうしたらいいか。複数の料理を同時進行で作る、自分で日程を組んで旅行する、毎日いろんな人と会話するとか、そういうことをしていたら認知症を防げます。私は、地域のための草むしりをするのも良い。また、孫の守りもいいと思います。地域に目を配り、創意工夫して、日本一の草むしり、日本一の子育ておじいちゃん・おばあちゃんになる！という目標を持っていただきたいですね。

(養老先生)

「フィンランド症候群」というのがあって、フィンランドで管理職くらいの方を2グループに分けて10年観察しました。一方は徹底的に健康管理をして、一方は好きにしろと放っておく。10年後の死亡率を見ると、4:6



マナビの
ウンチク



ロコモ予防運動

「ロコモ」とは、「ロコモティブシンドローム(運動器症候群)」の略で、骨や筋肉が衰え、寝たきりなどの要介護状態になる危険の高い状態になることです。ロコモになる原因は、日常生活の活動量の低下、運動不足、加齢などがあります。

京都市では、市民の皆さんに健康寿命を延ばしていただくために、ロコモ予防の運動プログラム「[京\(きょう\)ロコステップ+10\(プラステン\)](#)」を開発しました!

不良長寿

免疫学者の奥村康氏(順天堂大学名誉教授)は著書『「まじめ」は寿命を縮める「不良」長寿のすすめ』(宝島社新書)でフィンランド症候群について書いておられます。

で、医者が管理しているほうが多く死んでいるんですね。この現象がどのような日本語に翻訳されたかと言うと、「不良長寿」。(笑)

私たちがひとつこと！

会場にお越しの加盟団体の方から
感想とご質問



*NPO法人 つながるKYOTOプロジェクト 小辻 寿規さんから

孤独死の研究をしていますが、一人で亡くなると、なんでもかんでも「孤独死」と言われます。頑張っても誰にも頼らずに生きてきたことは、ある意味、勲章だと思います。あまりにも孤独死にマイナスの意味が多すぎて、頑張っても一人で生き抜いた人が、地域で悪い話になってしまうのはどう変えていったらいいとお考えでしょうか。

(養老先生)

僕は若い頃、孤独死された身元引受人のない方を大学で解剖させていただいていました。それがどんどん減り、経験的に言うと、一人で亡くなる方は相当減ってきたと思います。高齢化に伴い、お年寄りの絶対数が増えました。これはがん患者の増加も同じで、統計を見ると増えたように感じますが、年をとることは当たり前なのです。孤独死の問題も、老人が増えたことが関連しているのではと思います。ちゃんと自分で生きてきて、PPK（ピチピチコロリ）で亡くなった方も、死んでも自分は困らないと思えば、孤独死は気にならないと思います。

むしろ、ちゃんと生きてこられた方が亡くなったことに、近所の方などが気づかないような人間関係がまずい。問題なのは、2週間も1ヵ月も他の人に会ったことがないお年寄りが増えていること。自分のために生きているわけではないと思っていなかったのではないのでしょうか。そう思っていると、人と接せざるを得ないわけですからね。

*公益社団法人 京都府助産師会 会長 三反園 芳子さんから

婚活から終活まで幅広いユニークなお話をありがとうございます。

常々考えているのが、高齢出産が多くなって、出産のリスクが非常に高いことがあります。養老先生のお話のように、自然体で体を動かしておくことと良い時期に子育てができます。そういう社会でないと、非常にリスクが高くなってくるかと思えます。

(奥野委員)

高齢出産については、女性が働けるようになってきましたね。女性の能力が認められ、社会で雇用が増え、働き盛りのときに出産と仕事を天秤にかけた場合、やはり仕事を選ばざるを得ないという考え方になります。考えが

NPO法人 つながるKYOTO プロジェクトとは…

だれでも気軽に参加でき、ゆっくり心を休める「まちの居場所」、コミュニティカフェ、まちの縁側などの運営者や利用者を支援するために誕生した団体です。京都にまちの居場所を1,000箇所作ることを目標に、開設運営の講座なども行っています。



公益社団法人 京都府助産師会 とは…

地域で活動する助産師との連携を図り、京都府の母子保健の担い手として妊娠出産の援助のみならず、あらゆるライフステージにおける助産師の自主的な活動を支援。子育て支援センターの役割を中心に、多胎に関する子育て支援、虐待の予防、思春期教育などの活動を行っています。

「男性化」していることが第一の原因だと思います。しかし、私は「二兎を追うものは二兎を得る」と思います。私は二兎を得ているタイプで、そのために、実家の近くに引っ越して、まわりを固めたことが大きいです。子どもの面倒を見られないときは母にお願いする。ぜひ今日声を大にしてお願ひしたいのは、孫の面倒をみていただきたいということです。親であってもしけんかになることもありますが、それでも頼れるのはまず親です。皆さん、ご自身の生活が充実するように、いろいろしている方もたくさんおられていいことだと思います。でも、孫が小さいときはあっと言う間なんです。そのときに面倒をみていただくと、私たちは非常にありがたいです。

誰かがサポートしてくれることで、安心して産むことができます。労働人口の減少で女性が働かざるをえないこれからの社会で、孫でなくてもいいし、近所の人でもいいので、世代を越えたコミュニケーションがとれるように我々の世代も努力しないといけないのですが、先輩方も努力していただいて、お互いが歩み寄れると、もう少し安心して2人目、3人目を産もうという思いになれるんじゃないかと思いますね。

(門川市長)

大都市の中でも、京都にはまだ親だけの責任にしないで社会全体で子ども育てていくという雰囲気があります。保育所に入所している子どもの率（小学校入学まで）は42.5%で、大都市では全国で最も保育所に入りやすい状態になってきました。幼稚園も素晴らしいし、それだけやなしに、おじいちゃんおばあちゃん、そして血のつながらない地域のおじいちゃんおばあちゃんも、子育てをサポートする仕組みを通して地域でつながってほしい。お母さんが孤立して負担を抱えているのを支援していくのが大事で、高齢者の生きがいにもつながると思います。



最後にひとこと!

パネリストの皆さん



もっと体を使おう

(養老先生)

若い方には、体を使ってください。頭を使うより体を使うのが先だと申し上げたいです。

わずらわしさを越えた喜びを

(奥野委員)

冒頭の話にあったように、今は、みんなわずらわしいと思いやすい時代になっています。実は、わずらわしいことを越えないと喜びも何も無いということがすごく大事だと思っています。スポーツは特にそうです。ほんまにし



んどいことを何千回も何万回も繰り返して、ふらふらになって、頭で何も考えられないようになって、それでようやく体に染みついて、オリンピックという気の遠くなるような舞台でそれが発揮できる。

苦しめというわけですが、自分の可能性は掘り起こさないと出てこないの
で、若い人には自分を掘り起こしてほしいと思っています。皆さん、かわい
い孫にはぜひ旅をさせてください。

京都の素晴らしい「地域力」「人間力」を生かして

(門川市長)

素晴らしいお言葉、ありがたいですね。京都の素晴らしさは「地域力」で
あり、それを支えていただいている多くの人々の力、「人間力」だと思います。
少子高齢化社会であっても、あらゆる可能性がある。これを追求していき
たいと思いますし、同時に、若い人たちの素晴らしい出会いの場ができて、次
の世代を育てることを支援していけるような京都にしていきたい。それが高
齢者の生きがいにつながるような、そんなまちづくりを進めたいです。



夢ある京都の少子高齢社会を目指して

(堀場会長)

今日の3人、良かったでしょ。このテーマを話すにはこの3人以外に考え
られない。素晴らしい人を選んで良かった。

「年を取ったら京都行こう」とか「子どもを産むなら京都で産もう」「子ど
もに勉強さすなら京都でさそう」とか、京都はお年寄りにも赤ちゃんに対
しても、小さい子の教育に対しても、無限の可能性を持っているわけです。こ
れをわれわれが実行することによって、昔の大量生産・大量消費という経済
力でなしに、「人間力」「文化力」のまちに皆さんとともに仕上げていき
たいという気持ちを今日はますます大きく持ちました。皆さん、次回までの宿題
を出すのですが、今日来られた方はどうか少なくとも1組の夫婦を作っ
てください。(笑)



また来年、本フォーラムが楽しい集まりになりますことを心から願い、皆
様の御健勝と御多幸を祈りたいと思います。ありがとうございました。

(拍手)



いかがでしたか？

「少子高齢社会」は不安なもの…なんて、
考え次第で変わることがよくわかりまし
たね！

これからも私マナビィは京都市内をフン
フン飛び回って、生涯学習の情報をお知らせ
せすよ！

